

# 元祿時代における聖堂の機能と本質

— 近世宋学の効用に関する疑 —

和 島 芳 男

## 目 次

- 一、は し が き
- 二、聖堂の起源—忍岡聖廟の沿革
- 三、聖堂の造営とその経済
- 四、聖堂と儒者の蓄髪
- 五、聖堂の講釈とその効果
- 六、あ と が き

## 一

かの徳川家康の儒学尊重は諸書に載せられて有名であるが、それは家康が江戸幕府の創立者であり、後世「神君」とあがめられたからであつて、家康ほどの好學は當時の大名には珍しからぬことであると説く向もある。確かに尾張徳川義直、水戸徳川光圀をはじめ、保科正之、池田光政、少しおくれでは前田綱紀等、近世前期の大名に篤学の人々は少くなかつた。しかし封建社会において、上の好むところ下これにならうのは極めて自然であり、家康はじめ歴代將軍の学

問的傾向が特に天下の文教を左右することはさらに必然的であつた。ことに幕初以来九十年、元禄の盛世に当つて將軍職にあつた綱吉の異常な熱心による儒學尊崇の結果として、聖堂を中心とする儒教文化が未曾有の興隆を示したことは日本文化史上にかくれもない事実である。しかしこの聖堂が幕府の文政においていかなる地位を占め、いかなる作用を以て教化に貢献したかについてはなお考うべきところがあろう。またこの聖堂において講説せられる儒學が、家康以来の儒臣林家の朱子學であつたにしても、それが果していかなる程度にその本来の宋學的効用を發揮したかに關してはさらに究明すべき点が多々あるのである。本稿は主として元禄時代を中心として聖堂の沿革、使命および經營、經濟等进行分析し、聖堂の意義と価値とを通じて近世儒學史の一側面を明かにしようとするものである。

## 二

聖堂の起源は林羅山がその忍岡の宅地に孔子廟を営んだことにある。羅山はすでに慶長の昔、京都に學校を建てようとして家康の許を得たが、たまたま大坂の役が起つて着手に至らなかつた<sup>①</sup>。しかしその後十余年を経てかれの宿望は江戸において成就されることになつた。「大猷院殿御実紀」卷十六には寛永七年冬將軍家光が儒臣林道春信勝（羅山）に忍岡にて別墅の地五千三百五十三坪を与え、「學寮をいとなむべし」とて費金二百両を給したことが見える。そして同書卷二十一、寛永九年<sup>（一六三二）</sup>この年の条には「儒役林道春信勝かねて學校建つべしとてたまはりし忍岡の宅地に文廟をいとなむ<sup>②</sup>」とある。これがすなわち後の聖堂の起源であるが、この文廟が學校に附屬するものとして羅山が私に建てたものであることは右の二つの記事により明らかであり、幕府がこの文廟そのものの創建のために特別の援助を与えた確証はない。ただ右の寛永九年の記事に続いて尾張徳川義直がこの建廟の事を助け、聖像ならびに四配の像、祭器若干を寄附し、また「先聖殿」の三字をみずから書き、これを扁額として与えた<sup>③</sup>とある。このことは寛永十年二月に羅山が作つた「武州先聖殿記」に詳かである。その文によれば、当時忍岡にはすでに林家で建てた塾舎と文庫とがあり、今これに義直の

寄進により聖廟一字が加えられたことがわかる。<sup>④</sup> なおこの記はこの年羅山が先聖殿で始めて釈菜を行うに先立つて書いたものであるが、この釈菜もまた林家が私に行つたのであつて、幕府が公に関与した形跡はない。なおこの年七月十七日、將軍家光が先聖殿に臨んで聖像を拝し、羅山に命じて尚書彙典を講ぜしめたことがあり、これが將軍が孔廟に謁したはじめであるが、「大猷院殿御実紀」卷二十三にこの日家光が東叡山に詣り、その「御かへさに儒臣林道春信勝が忍岡の学寮によぎらせ給ひ」とある通り、いわばついでのことであつて、さほど重大な公式的な意味があつたわけではない。<sup>⑤</sup> その後寛永十一年二月、故駿河大納言忠長の旧邸を聖廟の傍に移築して講習所にあて、また慶安四年幕費を以て聖廟を修築せしめたのも、三四十年来の儒臣の功勞に対する報奨の一端であつたろう。<sup>⑥</sup>

この慶安四年の四月、家光は薨去し、家綱が將軍職を襲つた。家綱はじめは必ずしも好学の志なく、その儒学に熱心になつたのは主として補佐の任にあつた保科正之の指導によつたらしい。「土津靈神言行録」によれば、正之は承応元年江戸において始めて朱子の「小学」を読んで大いにこれを尊崇し、従前読んだ老仏の書をすべて焼き捨て、この年「輔養編」一冊を作つて幼少の將軍家綱に呈したとあり、また明暦二年十二月、家綱が始めて羅山を召して「大学」の首章を講ぜしめたことを聞いて正之は大いに喜び、「幕下の大道を聴かんと欲せらるるは誠に天下長久の基なり、何の幸かこれにしかんや」(原漢文)と賛歎してやまなかつたという。<sup>⑦</sup> この年阿部忠秋が將軍の命を奉じ、羅山に銅瓦葺の書庫一字を与えたのも、あるいは正之の周旋によつたことも知れない。<sup>⑧</sup> しかるに翌三年正月十八、十九兩日にわたり江戸市中に大火があり、神田にあつた羅山の本宅も類焼し、かの銅瓦庫も蔵書もろとも灰になつた。このとき忍岡の別宅および学舎、聖廟は幸に火をまぬかれ、羅山はここに難を避けていたが、蔵書の焼失を聞いて落胆の余りついに病を發し、この月二十三日、七十五歳で永眠した。<sup>⑨</sup> 家は三男春齋春勝(鷲峰)が相続し、万治二年二月および八月聖廟で釈菜を行い、以後毎年春秋二仲を以て定式とした。<sup>⑩</sup> 翌三年十二月、幕府は鷲峰に金五百両を与えて聖廟を改修させた。<sup>(一六六〇)</sup> 「昌平志」卷一によれば聖廟は去る慶安四年の修築後まだ廢退には至らなかつたが、その規模が狭小で出入にも不便で

あつたから特に命じて改築させることになつたもので、翌四年の夏に工事を終つた。このとき杏壇門の両方に廊を新築し、西向であつた門を南向とし、新たに外門を設けて入徳門といい、門外には石階をたたみ、すこぶる面目を一新した。この改修が林家の申請によらず、幕府から施行したものであつたことは注目に値する。<sup>(一六六)</sup><sup>(一六五〇)</sup>

これよりさき羅山はその晩年に幕命をこうむり、かの「本朝編年録」の編集に従事し、慶安三年に至つて神武天皇から宇多天皇までの四十巻の成稿をみた。その後史料不備のためこの修史は中絶したが、寛文二年十月幕府は鷺峰を召して延喜以後を続修すべきことを命じた。鷺峰はそのころ將軍家綱に五経を講じたが、翌年講了となり、十二月その賞として林家の忍岡家塾を弘文院と称することを許されたので、以後忍岡の林家の書院を弘文館と称した。<sup>(一六六二)</sup><sup>(一六六四)</sup> 翌四年七月幕府は永井尚庸に「本朝編年録」続補の事を奉行させ、八月弘文館内に長寮を建ててこれを編集所とし、また附属の文庫を設けて史料を集蔵した。右の「本朝編年録」の撰修はもとより幕府の事業であり、従つてその編集所や文庫は当然幕府の公的施設であり、これらに出入して修史に従事する鷺峰以下の人々の扶持ももちろん幕府の給するところであつた。これに対して林家の聖廟、林家の弘文館は依然として林家の私的施設に相違なかつた。しかしこの聖廟に近接し、この弘文館の内に幕府の公的機関が設置され運営されるに至つたことは聖廟、弘文館そのものにまで公的光彩を投影せずにはおかなかつた。寛文十年八月の聖廟の積業には修史の業の成功が併せて奉告され、太田資宗の家衆五十人を以て諸門を警固した。<sup>(一六七〇)</sup><sup>(一六七二)</sup> 同十二年春には幕府から材を給してかの林家の塾舎を増築し、延宝二年十一月にはまた幕府から費用を出して聖廟の屋根を葺きなおし、翌三年八月の積業には水戸徳川光圀が臨席した。鷺峰は同八年二月を以て卒したが、貞享四年將軍綱吉は鷺峰の子春常信篤(鳳岡)に弘文院学士の号を与えた。<sup>(一六七五)</sup><sup>(一六八七)</sup> これまた忍岡における林家の施設を公権的に光被するものにはかならなかつたのである。

註 ① 「羅山先生行状」(続々群書類徒三所収)。

② 「大猷院殿御実紀」(新訂増補国史大系三九所収)。なお近藤正斎「好書故事」(近藤正斎全集三所収)参照。



に謁し、次に鳳岡の書院に臨み、また寛永の例により尚書堯典を講ぜしめた。<sup>①</sup>「常憲院殿御実紀」卷十八にこの事を記して、「廿一日儒臣林弘文院信篤が忍岡の邸内に設けたる孔廟を拝し給はむとて、これよりさき齋戒したまふこと三日、けふ長袴めし、ならせらる、(中略)抑信篤が宅内の孔廟は、そのかみ尾張大納言義直卿好文の志あつかりしかば、信篤が祖父道春信勝がとき、かの卿よりここに設けられし所にて、寛永中大猷院殿聖道を御尊崇のあまり、ここにも御参りありしかば、けふ其の先蹤を追はせ給ひ、かく詣給ひけるなり」とある。この日綱吉はすこぶる満悦で、講書が終つて宴に移つたときにはみずから起つて舞つた。そして翌二年春にも再三聖廟に謁し、また鳳岡の書院に臨んだ。<sup>②</sup>

このように將軍の尊貴を以てたびたび訪れるからには、聖廟が一儒臣の私的施設であることは当時としてはいかにもふさわしくなかつた。元禄三年七月綱吉は鳳岡を召し、老中阿部正武、土屋政直、側用人牧野成貞を以て命を伝えていう、孔廟はもと尾張徳川義直がはじめたもので累代これをあがめて来たが、幕府の典礼にもとづかないから心になわぬところもあり、また敷地が寺院(東叡山寛永寺)に近接するのも憚りがあるから、新たに適当な地を選んで廟殿を造り、崇尚の義をあきらかにしたい、汝この意に副えと。鳳岡はもとより拝謝するほかはなかつた。ついで幕府当局は城北相生橋、すなわち今の昌平橋の外、神田台の地を卜定して土木を興し蜂須賀隆重に助役を命じて翌四年正月新廟建築の功をおえ、二月七日松平輝吉が指揮して忍岡の聖像をここに遷し、老中大久保忠朝以下がこれを杏壇門に迎えた。そして十一日、綱吉はまた盛服を着けて新廟に謁し、行殿においてみずから書を講じた。<sup>③</sup>新廟は忍岡旧廟の規模を一層雄大にし、しかも構造はさらに精美を加えたもので、大成殿を中心に御成御殿、饗座敷、役所、学寮等二十余棟をつらね、始めて仰高門を設け、その傍の屋舎を平素の講堂にあてた。また敷地は六千余坪に及び、附近の坂を昌平坂といい、したがつて新廟を昌平坂聖堂といつた。湯島聖堂とは所在地神田台の一名によつて呼ぶ名称である。綱吉はこの後もしばしば聖堂に謁し、元禄七年九月には生母桂昌院を同伴した。同十六年十一月江戸に大地震あり、数日後大火を發し、大成殿以下ことごとく焼亡し、聖像はからくも災をまぬかれた。宝永元年三月幕府は再造を令し、年末に至つて竣

功したが、諸堂の高さは三尺を減じ、御成御殿は復興に至らなかつた。翌二年三月綱吉は新廟に謁したが、その後ふたび参廟することなく、六年正月薨去した。<sup>(一七〇五)</sup>

綱吉一代の間、幕府の聖堂に対する態度はこれほどに積極的であつたが、聖堂そのものを幕府の手に移すまでには至らなかつた。かの元禄三年の造営のとき、綱吉はみづから「大成殿」の三大字を書き、十一月二十一日これに乾鯢（のし）を加えて鳳岡に与えた。<sup>(一六九〇)</sup>「昌平志」卷二はこの事実を掲げ、注している、「按ずるに、本朝およそ贈遺あるときは必ず乾鯢数片を加ふ、今、製字を賜ひ、加ふるに乾鯢を以てす、義ほとんど贈遺に涉る、興造の官挙に係り、義はすなはち林氏の私奉に涉るを見るべし矣、いはゆる官私ならび行ふとはこれなり」と（原漢文）。すなわち聖堂はやはり林家の聖堂であり、幕府の経営はいわば一種の寄進であつた。「常憲院殿御実紀」卷二十二に元禄四年二月十一日綱吉が新装の聖堂に謁したことを記し、「時に新廟成功し、祭式全く備はり、ほとんど崇敬の御素意にかなふ、今より永く祭費用のためとて、祀田千石をよせたまひ、かつ前よりたまはりし学糧は、故のごとく給ふべき旨仰事ありて」鳳岡は謝恩し奉つたとある。幕府がこのような寄進を仏寺に対する場合に准じて考えていたことは、鳳岡の孫林信言の事実記に元禄三年正月十三日綱吉が鳳岡を召した事をのべ、「上意の趣は今般昌平坂聖堂新規御建立に付、其方を開基と遊ばさるべく」などに見えることによつても知られる。この湯島聖堂の建立後も忍岡の旧廟は存置されたが、元禄十一年九月い<sup>(一六九八)</sup>わゆる中堂の火事の時先聖殿、林氏莊宅すべて焼失して再建のことなく、これらの敷地はみな寛永寺の境内に編入され、林氏には牛込に換地二千余坪が与えられた。<sup>(一七〇三)</sup>こうして寛永以来六十余年にわたつた孔子廟と林氏莊宅との因縁は解消し、湯島聖堂の公共性は相対的に一層著しくなつた。しかしこの聖堂が前記の通り元禄十六年に炎上し、翌宝永元年<sup>(一七〇四)</sup>再建されたときも、林家の請によつたことは「昌平志」卷二の記す通りである。すなわち幕府は依然として聖堂の主管者とはならず、ただ外護者の地位にとどまつた。聖堂が林家の私学から幕府の公学となつたのは寛政九年十二月の学制改革以後のことである。<sup>(一七九七)</sup>

かの忍岡の諸施設は林家の別墅における林家の私有物であつたから、その維持は当然林家の手で行わるべきであり、幕府は寛永、寛文兩度の造営をはじめ、その間度々の修築の都度その経費と用途とを弁じた。しかし聖廟の公共性がいちじるしくなるにつれて維持方法も追々改まらなければならなかつた。寛文四年八月林家の弘文館において幕府の修史が行われたとき、総裁林鷲峰を助けてその編集に当つた鷲峰の二子春信、信篤および門人書生筆吏等三十余人のため幕府は月糧八十口を給し、その後史生が増すに及んで月糧にも十五口を加えて九十五口とした。同十年六月修史の功が成るに及んで鷲峰には二百石の加増があり、信篤は銀百枚および時服を与えられ、以下儒員、伶工、徒弟らにもそれぞれ賞賜があり、十月また「林弘文院春勝（鷲峰）本朝通鑑編纂の間、そのことにあづかる徒弟に給はりし月俸九十五口をそのままこの後もあづけ給ふむね命ぜ」られた。<sup>⑦</sup>その後忍岡敷地の一半を上納させたのも、幕府がさらに忍岡敷地の経営に積極的に参加し、ますます恒常的な援助を与えようとしたのであらう。<sup>⑧</sup>元禄新建の湯島聖堂は敷地建物とも幕府がこれを整備し祀田千石を寄進して永代祭祀の料にあてさせたことは前記の通りである。その後享保七年にはこの祀田を小修繕の料にもあてることになり、また寛政二年には学糧五口を増して計百口とし、別に大学頭林信敬に塾糧三十口を与えたが、これらの処分はすべて大学頭にゆだねられたから、これらと林家の世禄との混同を来たしがちであつた。そこで寛政九年十二月、かの学制改革に際し、大学頭林衡の議にまかせ、廩米千五百俵を与えて実禄三千石とし、祀田の租入および学糧塾糧の出納はすべて勘定奉行の管理に移した。<sup>⑨</sup>これによつて聖堂と林家との財政は各別に独立し、聖堂の公共性はここに始めて確保されたのである。

註 ① 「常憲院殿御実紀」一八。「右文故事」一一、御代々文事表卷三、元禄元年条。「好書故事」二二、学校二、常憲公御時条。

「昌平志」二、元禄元年条。

② 「常憲院殿御実紀」一八および一九。「昌平志」同上。

③ 「常憲院殿御実紀」二三。「昌平志」二、元禄四年条。

④ 「昌平志」二。近藤正治「聖堂と昌平坂学問所」（「近世日本の儒学」所収）参照。



⑤ 近藤正治上掲論文参照。

⑥ 「昌平志」二。

⑦ 「嚴有院殿御実紀」二八―四一。「昌平志」二。花見朔巳「本朝通鑑考」（「本邦史学史論叢」下所収）。

⑧ 「昌平志」一、延宝己未忍岡凶条。

⑨ 「昌平志」二。「文恭院殿御実紀」二三（新訂増補国史大系四八所収）。

#### 四

これよりさき元禄三年十二月、かの聖堂の落成も近いころ、「儒臣林弘文院信篤（鳳岡）は明春より両典藥頭の上に着座すべき旨」を命ぜられ、翌年正月十三日「儒臣林弘文院信篤束髪命ぜられ、従五位下に叙し、大学頭と改称」した。<sup>①</sup>

「常憲院殿御実紀」卷二十三にこのことを説明して「そもそも本邦中頃兵革打ちつづきしよう、学政荒廢しければ、室町將軍の頃、文学五山緇流の手に落ちしより、儒をもて業とするものみな剃髪し、釈徒に同じ姿となりし弊習、数百年をへてあらたむる事を得ざりしに、当代聖人の道を尊崇あつく、しきりに学政の振起を給ふあまり、御英断ありてかくぞ仰出されける、これより旧年の弊風一時に改まり、官儒は更にもいはず、諸侯の門下に経をよこたへ、郷党に冊を挟む輩まで、みな汙俗を變じ、四海の内、儒者の道は即ち王侯士大夫の道にして、かの道釈の徒とは涇渭の別明らかにしることとなりぬ、誠に希代の盛挙といひつべし」といい、近藤正斎もまた「憲廟実録」を引いて「近古武家ノ世ト成テ文学廢替シ、室町家ノ時五山ノ僧徒ヲ請テ経藉ヲ講ゼシメシヨリ弊俗相及ボシテ儒士ミナ剃髪ノ形トナリ、豪傑ノ士モ改ムルコトヲ得ザリシニ、崇文ノ政、斯ニ及ベリ、（中略）誠ニ五百年来ノ盛挙ナリ」と特筆した。

しかしこれらの記載は必ずしも史実に合わない。中世に五山の僧徒が儒林において重要な地位を占めたことは事実であるが、僧形が儒道を独占したわけではない。本朝の儒宗といわれた菅原氏はもとより、古来の明経家清原中原両家は近世に至るまで道統連綿として絶えず、朝廷の儒官として衣冠を改めることがなかった。武家もまたかれらの家学を伝

承したことは金沢氏三代の事跡以下あまたの実例がある。家康もまた側近に清原宣賢を招いたことは諸書に見える通りである。これに対し僧形の儒者が武家に寵用されたのは、武家と僧侶とがともに律令制的身分序列の外に立ち、たがいに接近しやすかつたからであらう。しかもこれらの学僧は武家の故実、外交など、保守的な朝臣たちの思い及ばぬ方面においても武家に貢献することができたから、武家社会における儒道的主流は自然かれらの占めるところとなつた。武家の保護した足利学校の庠主が代々禅僧であつたのも、こう見て来れば極めて当然のこととなづかれる。かの藤原惺窩が禅林を脱してもつぱら儒を以て武家の世に立つことができたのは、累代歌学の家に生れた余慶と、神道家吉田兼見との養子縁組とに支えられたからであり、これはむしろ例外的な場合と見るべきものである。

家康が林羅山を登用したのは必ずしも家康が羅山の家学を以て幕府の教学の大本としようとしたからではなく、ただ羅山の博覧強記に注目し、すでに側近にあつた崇伝、承兌、靈三等の学僧らと同列に、羅山の儒学的素養を幕府の儀文、涉外等のために役立たせようとしたまでであり、そこに当然羅山の落髪が要求されたわけである。かくて慶長十二

(一六〇七)

年羅山は二十五歳で容を僧形に改め、以後道春と称し、数年後には弟信澄も剃髪して永喜と称した。排仏にかけては師の惺窩よりも徹底であつた羅山にとつて、これはいかにも宮仕えのつらさであつたろう。しかし元来処士の出であつた羅山が、武功によらないで武家社会で立身するためには武家としての身分的序列の外に置かれる方が少くとも便宜であつた。羅山はその後にも常に排仏を標榜し、仏氏僧侶を指すには必ず「浮屠」といい、仏寺の縁起や僧伝等の執筆は極力これを回避した。<sup>⑤</sup>容は僧形でも身は浮屠の列にはなく、あくまで儒道を以て幕府に仕える直参の意気であつた。この羅山にとつて、寛永六年十二月、弟永喜とともに法印に叙せられたことは、すこぶる当惑のほかはなかつたらしい。羅山がこのときのことを記した文の中で、「今余が兄弟もこれ儒なり、然るに祝髪久しきは国俗に随ふなり、太伯の髪を断ち、孔子の卿服すると何ぞ以て異ならんや、何ぞ傷まんや」といい、「墨して以て万古文章の印を伝ふ、これ吾が取る所の法印なり、これを心印といふもまた可なり矣」といい、「この授位吾が兄弟のかつて期望せし所にあらざるな

り、しかも今、上よりこれを裁す、則ち恩資また厚からずや、いはゆる天よりこれを命ずるものか」という（原漢文）。<sup>⑥</sup>  
いずれも極めて窮した遁辞であり、中江藤樹から「穿窬の盜の如し」という酷評を下された所以である。<sup>⑦</sup>

しかしながら法印はいうまでもなく僧の極位である。この極位が幕府の儒役に授けられたのは將軍の儒道崇敬の結果であり、武家社会における儒家の地位の向上の現れである。儒仏分離の傾向はすでにこの間にきざした。かの寛文三年十二月、林鶯峰がその家塾に弘文院の号を許されたのはこの分離の第一歩であろう。弘文院は速く延暦の昔、和氣氏がその子弟のために大学の南辺に設立した学曹の称である。また右の恩命を鶯峰に伝えた老中久世広之の奉書に宛名を「林学士」と記したことも注目される。この翌年、水戸徳川光圀は蓄髪還俗の事を林家に勧告し、延宝四年には水戸藩における儒者の僧形の廃止を断行した。<sup>⑧</sup>この後十数年を経た元禄四年、將軍綱吉が儒道に対する特別の崇敬を以て湯島聖堂を造営するときに当り、林家の当主鳳岡信篤に蓄髪任官を沙汰したのは時機まさに熟した観がある。古来の家格によつて光被されもせず、家学の伝統とてもない一儒家が、今や僧形を仮ることなく、その本来の面目と職分とを以て武家社会の身分的序列の中に地歩を占め、幕府の重臣と同様に五位の官を得たのである。こういう意味においてこそ実に「五百年來の盛挙」ということができる。

註 ① 「常憲院殿御実紀」二二、元禄三年十二月廿九日条。同二三、元禄四年正月十三日条。

② 「右文故事」一一、元禄四年条。「好書故事」一八。

③ 高柳光寿「藤原惺窩伝補遺」（『史学雑誌』四一の七）および「国史学」三所収同氏論文参照。

④ 拙稿「江戸幕府の朱子学採用説について」（『神戸女学院大学論集』三所収）第二節参照。ただし四六頁一七行目の「赤松広通に仕え」は「赤松広通に頼り」と訂正する。

⑤ 「羅山先生文集」参照。なお文集にはたまたま仏寺関係の記文を作らなければならなかつたときは必ず弁明を附してある。例えば卷一五、「高雄山神護寺募縁記」（元和八年）の後には「此記先生依或人紹介、不得止而代山僧而作也」とあり、卷一六「英勝寺記」の後には「昔先生侍駿府遇禪尼於御前（家康側室阿万の方、水戸頼房祖母）故今憑黃門（頼房）屢求之、黃門亦固請、故不能峻拒焉」と註する。

⑥ 「羅山文集」(「好書故事」一八所引)。

⑦ 「藤樹先生全集」一所収「林氏剃髮受位弁」にいう、「夫林氏之剃髮、非仏者則假形之徒也、非從国俗也不言而可知矣、而自附於斷髮之權、卿服之義、自欺而欺人、其所以惑世誑民、充塞仁義、不可勝言、譬諸小人、其猶穿窬之盜也」。なお前掲拙稿第二節参照。

⑧ 「好書故事」一八に「寛文三年十二月廿六日林春齋へ弘文院ノ号ヲ賜フ、其奉書左ノ如シ」とて次の文をあげる。

五経講釈今度不残事畢之趣達台聴候、古来稀成之儀ニ候之条、忍岡家塾称弘文院、弥可勤儒業之旨、依仰執達如件

寛文三年

十二月廿六日

久世大和守広之  
稲葉美濃守正則  
阿部豊後守忠秋  
酒井雅楽頭忠清

林 学 士

⑨ 栗田元次「綜合日本史大系」九、江戸時代上、第七章第一節第一項参照。

## 五

そもそも忍岡は寛永七年「学寮をいとなむべし」とて幕府から林氏に与えた宅地であり、同九年ここに聖廟が創建さ

れる以前にすでに林氏の塾舎と書庫があつたことははじめに述べた通りであるが、この忍岡の学寮に一体何人の寮生が

おり、いかなる講義を聴いていたかは詳でない。思うに幕府の儒役として繁忙を極めた道春(羅山)はここで「学校」

というほどに多くの学生に教授する暇はなく、ただ公務のかたわら少数の塾生あるいは学僕に書を講じた程度ではな

かつたろうか。聖廟は鷲峰のとき増築されたが、この鷲峰の弘文館は林家の書院であつて、学寮が拡張されたのではな

かつた。寛文三年以来この弘文館で「本朝編年録」が編集されて、鷲峰を総裁としてその二子以下門人書生筆吏等三十余

人がこれにあづかつたことは前記の通りである。同六年五月弘文館に経義、史学、詩文、博読、皇邦典故の五科を設

け、また大員長、左右員長、員実、員待、員秀等の諸職を置いた。しかし門生等が修史の事に追われている間は五科の

授業ももとより満足には行われなかつたに違いない。その後寛文十年修史の業が成功し、しかも門生等の月俸九十五口を引続き林家に預けて学糧にあてさせてからようやく五科の学生が忍岡の家塾をにぎわすようになった。塾舎ももとは南北の二舎であつたが、十二年春に至つて東西の二舎が増置された。<sup>(一六七〇)</sup>元禄四年正月湯島の聖堂が落成し、忍岡の聖廟から孔子および四配の像が移されたときには学生十人がこれに従い、ついで將軍綱吉が新廟に謁した日には事に当つた学生二十六人に白銀五十枚が与えられた。<sup>(一六九一)</sup>

この湯島の聖堂にも附属の学寮があつて学生を收容し、また仰高門内に左右にならぶ二舎のうち東舎を以て平素の講經の所とした。<sup>(一六九一)</sup>元禄四年春にはここに三百余人が集まり、舎内に入らぬ者は席を地に敷いて聴講し、大学頭信篤をして「われ講說年あれども聴衆の多き今日の如きを見ず、実に文教の致す所なり」と述懐せしめた。<sup>(一六九一)</sup>これは聖堂落成当初のもの珍しさが手つだつてのことであらうが、仰高門の講釈はこの後も恒例となり、士分の者は毎々参聴を許された。学生中にはその学糧を幕府から施与されるものが多かつたが、その直接の給付は大学頭の管掌に属したから、かれらも実質上は林家の私学生に異ならなかつた。第一、聖堂そのものが林家の「開基」に係り、幕府はその外護者であつたことは前にみた通りである。しかし幕府の外護する聖堂において幕府の儒官である大学頭が講說する内容が幕府の教学の大本たる權威を帯びたのは極めて自然であつた。そしてこの權威を一層強からしめたのは將軍みづから聖堂で書を講じた盛事であつた。

綱吉は昔館林の大名であつたときから生母桂昌院の教訓に従つて儒学を学び、みづから近臣に書を講じた。將軍宣下の後、延宝八年九月林信篤を召して「大学」を講ぜしめて以来、月三回講筵を開く例となり、天和二年元旦に柳沢保明に「大学」の三綱領につき講義させてからは毎年講書初の儀を行うようになった。そして元禄三年八月老中以下諸役人を集めてみづから「大学」を講じたのははじめとして、以後毎年四書の講義を続け、後には大名、旗本以下儒臣、僧侶、神官にも聴問させた。このところすでに湯島聖堂の造営が進捗し、元禄四年二月十一日綱吉をはじめてこの新廟に謁し

て釈奠を見、そののち、行殿に入つてみずから書を講じ、諸老臣および儒臣等に謹聴させたのである。これは聖堂史上の最も輝かしい一頁であつたばかりでなく、幕府の儒教尊崇を天下に宣明し、聖堂儒学の權威を一世に顕揚する無二の機会であつた。なお綱吉の熱心はこの後ますます加わり、城中における毎月数度の例講のほか、しばしば柳沢氏その他の大名の邸に臨み、まずみずから書を講じ、次に亭主やその家臣の進講や討論を聴いた。また年頭の勅使を城中に迎え、御馳走と称して將軍の講書を聴かせたことも再三であつた。綱吉はことに「孝経」「大学」の講義を得意とし、朱注を併せて読誦流るる如くであつたというが、その講筵の最も多かつたのは「周易」であつて、元禄(一六九三)六年四月開講以來、同十三年十一月までの八年間に二百四十座に及び、家門、譜代、外様の諸大名をはじめ旗本から諸宗の高僧、社人、山伏、下は儒生に至るまで志あるものには月に六回まで登城を許して聴講させた。まことに綱吉の一代こそ徳川文教の最高潮期というべきであろう。

問題はこれほどの將軍の好學が教化のためにどのような効果をあげたかということにある。綱吉の「ふかく伊洛の書に御精神をそめ給ひ、御病臥といへども書卷をはなち給はず、儒臣を接近し、聖道を討論し給ふ事はさらにもしは、御みづからも經書を講演し、内外の臣等に拝聴せしめらる、その度々には御上下をめし、御剣をも遠くさけ給ひ、先聖を敬礼し」、講説に當つては「英弁泉の如く湧き、精義綺の如く繁(オヤヤカ)にて奉問奉対する輩、汗流れ神奪はれ、敬服せずと言ふことなし、問或一言の義に中(また)り、片辞の理に合へるをば色を降し顔を柔げ、歎美賞誉し給はずといふことなし」という恭儉な態度は前後の將軍にその比を見ないところであり、その生母桂昌院に対する孝養をみれば実践においても多く欠くところがなかつたと考えられるが、かの史上に名高い生類憐れみの令などと思ひ合わせれば、この將軍の何事につけても極端に進まなければやまぬ「偏執狂的」態度は結局みずからを疲らせ人々をもつまづかせずにはおかなかつたように感ぜられる。宝永二年三月、綱吉が再建成つた湯島聖堂に臨んだのはその第十六回の参廟であつたが、その後は(一七〇五)ふたたび孔廟に謁することなく、將軍の講書もこの年を以て一段落となつたらしい。まして宝永六年正月綱吉が薨じて(一七〇九)

家宣の世となり、新將軍の信任を得た儒臣新井白石がその博識と強情とを以て縦横に才能をふるうようになってからは林家は事ごとに圧倒されがちになり、聖堂儒学の權威も追々に昔のおもかげをとどめるばかりとなつた。

しかるに享保元年四月<sup>(一七六)</sup>、將軍家継が薨去し、紀州家から吉宗が入つて宗家をつぐに及んで白石はしりぞけられ、かねて吉宗に書を講じた林信篤が早速召されて進講の事に當つた。しかし將軍吉宗が儒学に心を用いたのは綱吉のように個人的好學によつた事ではなく、主として教化の実効を期待しての事であつた。

享保三年五月の初<sup>(一七八)</sup>、吉宗は湯島仰高門の講釈を庶民にも開放し、林家の門下をして毎日書を講ぜしめたが、参聴する者は直参が七八人、その他も極めて少数であつた。翌四年十一月<sup>(一七九)</sup>吉宗はさらに高倉屋敷にも四書の講座を開き、木下順庵門下の諸生にこれを担当させたが、こ

もまた聴衆が少くしてはなはだ不振であつたから、「一人も多く参る様にあらせたきものなり、汝等が教導の仕様にて多くなるべき事なり、心を入れて教授に励むべし」と諸生を督責した。これに対し木下菊潭、室鳩巢らが、「是迄の如く心のままに講席に出る様にては人々怠りて奮發する者少かるべし、よりに旗本中に學問する様命令を下し、又諸大名諸役人へも上の思召により出席せよと御老中より命令を下されなば、已むを得ず出席して生徒も増し、その内には自然に會得して真実に學に志す者も出で来ぬべし」といい、大學頭林信篤もまた湯島の學問所に入學する者の増すよう嚴命を下されたいと願ひ出ている。いずれも學者としてすこぶる自信を失つたものであり、吉宗の不滿はいうまでもない。しかも吉宗があくまで強制的手段を避け、「およそ學問なるものは威命によりてなす時はその末遂げぬものなり、常憲院様(綱吉)御代、深く儒学を好ませ給ひ、群臣に命じて學問を仰せつけられたるため、一同殊の外難儀致し、今に至るまで懲り居る次第なり、とかく上より押して命ずるに及ばず、人々の心より向ふ様になし給はんとの盛慮」を示したの<sup>⑩</sup>は、さすがに名君の見識というべきであらう。

かつて柳沢吉保に仕えて將軍綱吉にも親近した荻生徂徠は吉保の失脚以来市井の一儒者に還つていたが、かれはその著「政談」において享保初年の文教につき論評を加え、昌平坂や高倉屋敷で儒者が講釈しても旗本の武士の聴く者は絶

えてなく、ただ家中の士や医者、町人などが少々承るに過ぎない、これらの輩のために世話をして世話をしても詮のないことである、また公役人を師としては人々の心がすすまぬものである、それは役目として講義するだけで質問にも親切に答えず、師に権が無いからである、それよりも「儒者ヲ江戸中所々ニ配リ置キ、人々勝手次第ニ参ル様ニ有度コト也」といつた。<sup>⑨</sup>確かに徂徠のいう通り、昌平坂も高倉屋敷も場所が悪いのであるから、市中適當のところ新たに学校を設けて図書を備え、学生の修学の便をはかるのは文教振興の一策である。現に享保六年春のころ木下菊潭は学校新設のことを幕府に上申し、吉宗もまたその敷地、設計等に関する調査を命じた。しかし室鳩巢は「旗本中風俗惡敷罷成候間、是は学校建立いたし、急度教を立候はば可宜旨類に申候、此儀は如何存候哉」と疑い「近年御旗本中衣食に足不申候故、教の所へは参候儀にて無御座候、然処今の時学校等の御沙汰候はば、一円心服は不仕候」と反対した。<sup>⑩</sup>「有徳院殿御実紀附録」巻十には「学校のことは、たとへ所々に造立ありても、入学の生徒、学にむかふもの乏しきときはせんあるまじとさえ申すものありて、其事行はれずなりしとぞ」と見える。これ実に湯島聖堂創設後三十年のことであつた。しかも幕府は享保七年聖堂諸費の儉約をすすめ、祭祀等の費用はすべて祀田の収入を以て弁ずるように諭さなければならなかつた。<sup>⑪</sup>この翌年信篤は致仕し、その子信充および孫信言が相ついで大学頭となつたが、かろうじて父祖の遺跡を保つに過ぎず、聖堂そのものも安永天明兩度の火災にあつてわずかに形を存するばかりとなつた。<sup>⑫</sup>こうして聖堂がふたたび昔日の威厳を回復し、教化の使命を負うためには、やはり寛政九年の改革を待たねばならなかつたのである。

註 ① 本稿第二節参照。

② 同上。

③ 「昌平志」二。

④ 同上。

⑤ 「常憲院殿御実紀」二二三。「昌平志」二。

⑥ 「昌平志」二。



⑦ 「常憲院殿御実紀附録」中。「好書故事」一。同二。同三。

⑧ 同上。

⑨ 加藤虎之亮「綱吉と儒学」（「近世日本の儒学」所収）。「常憲院殿御実紀」一。「憲廟実録」二一。栗田元次「綜合日本史大系」九、江戸時代上、第四章第一節第三項参照。

⑩ 「昌平志」二。「好書故事」三。なお「偏執狂」とは栗田前掲書の上記個所に見える詞である。

⑪ 平野彦次郎「吉宗と儒学」（「近世日本の儒学」所収）。なお「有徳院殿御実紀附録」一〇および一一（新訂増補国史大系四六所収）参照。なおここに示された吉宗の「盛慮」は小納戸浦上直方が菊潭を訪れ、吉宗の主旨を回示したときの辞による。その中「常憲院様御代云々」は徳川將軍自身が以前の將軍の政治を批判した言葉としても珍重すべきものである。

⑫ 「政談」四（「古事類苑」三八所引）。

⑬ 平野前掲論文。享保七年六月晦日付室鳩巢書状。

⑭ 「昌平志」二。

⑮ 近藤正治「聖堂と昌平坂學問所」（「近世日本の儒学」所収）。

## 六

私はかつて「江戸幕府の朱子学採用説について」と題する論文を草し、家康が儒学諸派のうち特に朱子学を採用して幕府の教学の大本としたという旧説を疑い、(一)家康が藤原惺窩の学に感じたというが、惺窩が始めて家康に謁したころはかれはまだ宋学的立場を確立していなかったし、またついに家康には仕えなかったこと、(二)惺窩に代つて家康に仕えた林羅山はその朱子学者たる名分に徹せず、とかく権勢に阿附し、ただその博覧強記の才能を以て幕府の制度儀礼の方面に奉仕したこと、(三)家康の開版した書目からみても、家康が特に朱子学にのみ着目してこれを奨励したとは認められないことを挙げ、家康はその幕藩体制確立のために儒学を援用しようと考えたまでであり、ただたまたま家康が最初に接した儒家が朱子学を標榜する者であつたが故に自然に朱子学を採用した結果となつたことを明かにし、宋学が近世封建社会の文化的側面の支柱になつたという最近の諸説に反対した。<sup>①</sup> 羅山の子孫は引続き幕府に登用されたが、これらも

ただ父祖の家業を守り、將軍の侍講たるかたわら文廟の釈奠をつかさどるぐらいのことで、制度儀礼に関してはすでにそれぞれの有司がそなわつたから、林家が幕府の文政にたずさわる余地も以前ほどには多きを得なかつたのである。

將軍綱吉は、湯島聖堂の創建、儒者の蓄髮任官、經書の親講など一連の施設によつて近世儒学史上に一大時期を劃したが、これまた必ずしも日本の宋学が幕府の教学としての地位を確立したことを意味するものではなかつた。もとより綱吉の講釈は新注に拠つたが、それはかれが主として林家の進講を聴いたからであつて、綱吉が新古二註の異同、優劣について特別に定見を有したという確証はない。ことに宝永二年二月、柳沢邸における講釈に際し、荻生徂徠等に命じて「中」の字について唐音で議論させたことなどについて考えると、あるいは綱吉の興味は注疏よりも別の方面にあつたかとも思われる。なお綱吉一代を通じての狂熱的ともいうべきほどの儒学尊崇にもかかわらず、聖堂は依然林家の「開基」に係り、その学問所も結局林家の家塾の拡充されたものにはかならず、幕府自身が別して宋学振興のための文施設を持たなかつたことは最も注目されなければならないところである。

將軍吉宗は林家を督励するとともに木下順庵門下を大いに登用した。順庵一門もみな朱子学を奉ずる者である。しかし吉宗の学問奨励は、綱吉が自己の嗜好にもとづいたのとは異なり、まつたく經世済民のためであり、別して学派の如何にかかわるものではなかつた。吉宗が学派の別について無見解であつたことは「有徳院殿御実紀附録」卷十一に見える室鳩巢との問答によつてもうかがわれる。吉宗は綱吉の失敗にかんがみ、あくまで強制を避けて士民、特に旗本の自発的好学を期待したが、ついにむくいられることがなかつた。ことに学校新設の計画を放棄しなければならなかつたのは吉宗の最も遺憾としたところであろう。

④ 思うに「朱子学のもつ学問的性格は幕藩体制の教学としてその体制、秩序を維持する道德、思想となるにふさわしかつた」としても、宋学がこのような効用をどれほど發揮したかはおのずから別問題である。綱吉、吉宗など歴代將軍の努力にもかかわらず、旗本衆にも儒学を尊崇する志薄く、幕府の当局すら聖堂に関し驚くべきほど無知であつたことは

「甲子夜話」の伝える次の話によつても知られる通りである。

中江深藏 諱明遠、  
号蘭林

宝暦頃の奥儒者たりしとき、誰一人敬礼するものもなく、当直に出れば若き納戸衆など、孔子の

奥方御容儀は美なりしや醜なりしやなど問て嘲弄しけるとぞ。余りに甚しき事ならずや。明安の頃、節儉の政令厳刻なりしとき、其旨を希ひし作事奉行より、聖堂は第一無用の長物なれば、取崩し然るべしと建言せしを、国用掌れる老職水野羽州（忠友）聞居て、既に高聴に達せんとして御用御取次衆へ申けるに、取次衆聖堂と云もの何なることを知らず、奥右筆組頭大前孫兵衛に聖堂に安置あるは神か仏かと尋ねしかば、大前たしか本尊は孔子とか云ふことに候と答ければ、取次衆其孔子と云は何なりやと又尋ねければ、大前、論語とか申す書物出候人と承り候と答けるに、取次衆打うなづき、嗚呼それにて分りたり、道理で聖堂崩しの沙汰を聞て、林大学頭が唐へ聞へても御外聞がわるると申たりと聞及びぬ、さらば先暫く見合せ置方なるべしとて高聴に達せず。<sup>⑤</sup>

朱子学が幕府の教学の大本をなし、宋学が近世封建制の文化的支柱となつたという通説はここにおいてふたたび否定されなければならない。かのいわゆる寛政異学の禁は幕府文教のこれほどの行きづまりを打開しようとしたものであり、寛政九年の学制改革もこの新方策の一端にはかならなかつた。これらの寛政度の諸改革の意義については、後日別に論考を發表する所存である。

註 ① 「神戸女学院大学論集」第三号（昭和二十九年十二月五日発行）所収。

② 「好書故事」九、講筵九、宝永二年二月五日条。

③ 室鳩巢が侍講であつたとき、吉宗が伊藤仁斎のことをたずねたので、鳩巢は、仁斎は程朱の正学をそしめる故異学であると答え、さらに朱子学、陽明学の区別を説明したが、吉宗は容易に納得しなかつたのである。なお吉宗が紀州侯時代、正徳三年に創立した藩校、すなわち後の学習館の規則の第一条には、「学所以明人倫也、修己治人之外、無復他道、二者宋学尽之、故封初以来遵守、公制学宮、所講以宋註為主、不許雜他説、歷世奉以周旋、不敢失墜、今因以為永規」とあるが、この規則は文化三年に卒した助教山本維恭の著に係り、必ずしも吉宗の旨を伝えたものではない。

④ 新日本歴史学会編「新日本歴史」桃山江戸時代、一四二―一四三頁（まづしまえいいち氏執筆）。なおこの説に対する反駁は前掲拙稿第四節参照。

⑤ 「甲子夜話」卷四。本書は旧平戸藩主松浦鎮信がその一生の見聞を筆録したもので、「国書刊行会叢書」に収められている。

（昭和三十一年五月二十九日稿）

Yoshio Wajima

The Confucian Mausoleum at Yushima, Yedo ;  
Its Function and Nature about 1700 ;  
An Inquiry into the Use of Confucian  
Doctrine under the Tokugawa Shogunate.

Résumé

It is said that since the early part of the sixteenth century, when Hayashi-Razan was engaged by Tokugawa-Ieyasu, founder of the Shogunate, Confucianism became very influential as a doctrine which maintained the feudal system throughout the age, until the Yushima Mausoleum was established in 1691 as the educational centre under Tokugawa-Tsunayoshi, the fifth Shogun.

The Yushima Mausoleum, however, was nothing other than a private institution founded by the Hayashi family, though it was dignified with Shogun's support and worship. The Shogun's government did not have its own educational institution in Yedo. Moreover, Tsunayoshi's encouragement of Confucian study was so fanatical that it exhausted his attendants' patience, as well as that of himself. So that, when Tokugawa-Yoshimune, the eighth Shogun, opened the lecture in the Mausoleum to the public, its audience was quite small, among them Shogun's retainers being especially few. The use of Confucian doctrine under the Shogunate can not be overestimated as it has been hitherto.